会員研究

「大和守日記」

家康ひ孫大名の生活と人生〔その3〕

長尾正和

この八月、「引っ越し大名三〇〇〇里」という映画（松竹）が公開された。

本稿（その1）でも触れたが、この日記をしたためた越前松平大和守家第二代当主松平直矩がその大名である。江戸時代全大名の中で最多の六場所の勤務を経験したためこのような呼ばれ方をした。

映画（原作は同名の小説）は、かれが播磨・姫路藩主のとき、豊後日田（大分）への国替（転封、お所替えともいう）を命ぜられ、家臣全員が家族と共に引っ越しを余儀なくされたときの顛末を面白おかしく描いている。

他に作家の杉本苑子氏の短編集「引っ越し大名の笑い」でも小説のネタにされている。殿の名前と藩の引っ越しは事実だが、当たり前とはいえ、ほかの要素は映画でも小説でも、ほとんどが全くの創作の世界といえよう。

現代になって作られたイメージと、この「日記」から見える姿は大きく違うことを改めて指摘しておきたい。

5．日ごろの生活

（1）結婚

前回までは大名の公的な側面を中心に紹介したが、ここでは個人的な生活に焦点を当てる。

結婚したのは十九歳のとき、この時代では決して早い方ではない。お相手は父直基が亡くなったあと、将軍家光から父代わりを務めるよう命ぜられた伯父の出雲藩主・松平出羽守直政の娘「駒」である。いとこ婚であった。

直矩の家老たちがこの縁談を強く願っていたが、もともと体の弱かった「駒」の婚姻には父の直政は賛成ではなかった。しかし、結局幕府が認めたため話が進むことになる。

輿入れしたのは万治三年（1660）四月二十二日。この日の様子について、行列を担った直政の家臣名や、隊列の様子などを淡々とではあるが、詳しく記録している。

しかし、そのあと「駒」にはどのような愛情を注いだのか、あるいは、日ごろどのような気持ちで接していたかなどを示唆する記述は非常に少ない。宴席を共にしたことが数回記されている程度である。

その後駒は身ごもったが、恐れていたように寛文三年（1663）一月二十九日に流産し、母子共になくなってしまう。わずか婚姻二年九か月後、彼が江戸滞在中の出来事であった。

このような大事な話だが、どういうわけかこの前後の月においては、かれはほとんど書いていない。あまりにも悲しみ、気落ちしたのかもしれない。

駒を失ってわずか半年後には、後に継室となる東園大納言基賢の娘「長」を越後村上に迎えている。

寛文三年九月二十七日

「雨天　京都よりの召使来に付　為向太田半右エ門　女にはさし　岩船まで遣　同晩召使いの女来る　長鮑斗を遣わす　同夜伊白丸に寝る」

周囲に気を使ったのか、「京都より『召使い』が来る」と表現している。

駒が没してまだ間もないこの時期に、なぜ公家の娘が側室候補としてやってきたのか。

これは父代わりの直政の判断による。娘の駒が病弱なので嫡子が生まれない可能性を憂えており、娘を嫁に出すと同時に、直矩の家老の白井頼母助と小河原武太夫の二人に、そばに仕える女性をも探すよう勧めていたからである。（直矩公御代記）

藩主嫡子が生まれなければお家断絶になりかねない事態になることを懸念しての、この時代ならではの決断であった。

「長」の父基賢は正二位大納言の官位を持つ最上級ともいえる公家である。どういう経緯で東園家の娘にたどり着いたのかははっきりしない。徳川一門の大名、あるいは家康ひ孫という事も影響しているのであろう。

「長」は育ちもあり、相当教養

も高かったが、直矩は初めから相当馬が合ったように見える。彼女への愛情が次第に深くなった様子があちこちから読み取れる。

九年後、寛文十二年（1672）には晴れて正妻（継室）となり、江戸に住むことになる。男子一名を授かっている。

（2）遊び友達

現代でも企業や政界でトップにある人物は基本的に孤独であるという。大名も似たようなものといえよう。

「日記」はかれが十代最後のころから二十代前半という青年大名のときだが、日ごろかれが接触しているのは重臣、老臣や役職付の侍たちであり、それなりに気遣いも必要な相手でもある。

しかし日ごろの生活で楽しんでいた第一の仲間は、元服前後の若者たちからなる近習やさらにその年下の小姓たちで、それに重臣たちの息子たちが加わっていた。

心ある家老たちは、直矩のように幼くして父を亡くした人物の君主教育のために、その役割を担えそうな若者をこのような役職に就けて周辺に集めていたことがわかる。

将軍家光が幼少のとき、同年代の仲間が小姓等として付けられ、共に育ち、のちにかれらが幕府重臣となったのはよく知られている。

直矩の場合もこれら近習や小姓の一部は、のちに藩の重臣としての地位を得ている。

これら若い仲間とは、いつ、誰と何をして楽しんだか、その様子をまめに記している。遊山、鷹狩り、鳥追い、釣り、弓、等々アウトドア系もあればお香、歌等の室内ものも多い。

遊山は文字通りかれらを連れて山々を遊びまわることで、直矩はしばしば馬で参加している。鷹狩り、鳥追いの数も多い。釣りは、国元にいるときには近くの越後・瀬波海岸、江戸にいるときは芝下屋敷前の海での八ゼ釣りであった。同行した仲間の個々の釣果や、船酔いのため釣りもろくろくできなかった者の名前なども記している。

なお、これらの記述は歴史的にも貴重で、わが国の江戸時代の釣魚史を語るときにしばしばこの「日記」が引用されている。

若者たちを集めての弓大会も催している。そのあとは当然のように宴となる。かれらは直矩の飲み仲間でもあった。

（3）女性達

かれにとって親族の女性達も気の置けない相手であろう。

実母は父直基側室で堀氏の娘であったお万、のちの永寿院で、江戸の中屋敷に住んでいたが、直矩が十九歳のときに亡くなっていることもあってか記述は少ない。

江戸滞在中最も多く訪れているのは父直基の正室、すなわち直矩の義母にあたる零台院である。

直矩は登城の帰路には頻繁に零台院を訪問しており、国元村上に帰るときには零台院も涙を流して彼を見送り、その後も手紙のやり取りを数多くしている。お互いに実の親子のような付き合い方であった。

女性たちの中で、おそらく最も気やすく日ごろ接していたのは、直矩の日ごろの生活の面倒を見るお付き女中たちであろう。

藩主に嫡子が生まれると正式な傅役（もりやく）や乳母が決められるが、実際に日常を共にしているのは彼女たちとなる。

日ごろのお世話ながら、立ち居振る舞い等も含めて幼い時から将来の君主としてのそれなりの教育も心掛けなければならない。このため、上位のお付き女中は家臣たちの妻や娘の中から、武家としてのそれなりの教養や品格を有する女性を選んでいた。

直矩自身の奥女中には、その幼少期から「局」（責任者）を筆頭に「さし」、「たま」の三人が付いた。

直矩はこの三人については、多くの出来事を書いている。花見、月見などの季節折々の催しには宴席をよく設けており、家臣たちとの飲み席にも、彼女たちをわざわざ呼び出して興を共にしている。彼女たちも直矩の誕生日には弁当を用意して席を設け、殿を楽しませている。

直矩は戯れにではあるが、女中たち三人の名を入れて狂歌も詠んで彼女たちを喜ばせる。

寛文三年八月九日

「夜月さへ　伊白丸月を見る
内の狂歌
玉々にさしにし月のさし入れ
て心も清き我が局哉」

また、直矩は感謝の気持ちを公式な席でもそれを示しすべく家老たちを同席させ、加増を伝えるとともに、祝いの熨斗鮑を与えて、さらにそのあとの宴で十分酔った

ことを記している。

寛文三年十一月二十八日

「・・・加増遣・・・五両長浜六両局四両指　これは我若年之時よりほねおり候に付也この三人は伊白丸表にて白井頼母助　小河原武太夫　根村源兵衛も着座す時分言渡也各長鮑遣之　家老共の久敷居酒酔」

（4）文芸

かれは能、歌舞伎、浄瑠璃等に相当造詣が深いことはすでにふれたが、国芸研究者もよくこの「日記」の記事を取り上げているのでここでは省く。

ほかにも和歌、絵画等も相当なレベルであった。「日記」にも数多くの歌を残している。ちなみに江戸を離れていても最愛の「長」とは歌のやり取りが多い。彼女も和歌のレベルは高かった。

絵画、古美術についての造詣も深く、のちの近世絵画の研究者たちもこの「日記」での記述を時折引用している。

当時の大名に人気であったのは狩野派だが、直矩も狩野法願（探幽）に棚絵を頼み、それができたことを喜び、また、町人から売り込みに来た雪州の三幅一対の墨絵については専門家にその真贋をチェックさせるなど念を入れて購入している。

これらを集めて、江戸住まいの大名たちを集め、書院開きの宴も開く。美術品のお披露目も当時の大名たちの愉しみの一つであった。

読書も好み、「源氏物語」は寛文五年十一月に読み始め、翌年四月半ばに読み終わったと書いている。その後あらためて書物そのものを入手したと記す。当時書物は高価であった。よほど気に入ったのであろうか。

6．姫路所替え

（1）姫路所替えの命

七歳にして形式上は姫路城主になりながら、姫路には行けないまま越後村上に転封となったことはすでに触れたが、その十八年後、寛文七年（1667）八月、晴れて姫路城主に返り咲く。

このとき二十六歳、西国の外様大名ににらみを利かす重要地、播磨・姫路藩主にふさわしい成人大名となっていた。

姫路城主になれるのは、家康の娘を正室とした池田輝政以来、徳川一門家あるいは本多、榊原、酒井のトップ譜代大名だけであった。

姫路任務の命を受けたときの喜びは「日記」のあちこちから読み取れる。

その高揚感は、まずはその命を受けるための江戸入りの様子に現れている。村上から江戸までの参勤日程は九泊十日にほぼ固まっていたが、このときはわずか六泊七日であった。

家臣団を引き連れて一日五十㎞くらいは進んだことになる。当時男子は通常一日十里、四十㎞ほどは歩いているから、集団としては相当な速さである。

強行軍での江戸到着後のその日には大老酒井雅樂守の屋敷に挨拶に向かう。翌日には老中稲葉美濃守より切紙（連絡文書）が届き明日登城するよう指示がある。

江戸城に入ると将軍家綱がかれを近くまで呼び寄せ、「ご家門という立場もあり姫路への所替えを仰せつける」と直接申し伝えている。

寛文七年六月十九日

「巳の上刻登城　御目見御近くへ寄候様にとのお事にて・・・御上段の側まで寄候様にとの御事にて　ご上段のそば迄寄上意には神妙在之　心安く思召され筋目有之候に付　播磨姫路へ所替え仰せつける也御請・・・」

（2）所替え道中、城受取

直矩はこれをありがたく受ける旨述べて引き下がり、続けて大老酒井雅樂守を含め並み居る幕閣にも縷々お礼を述べて退出する。

事前準備を全て済ませ、命を受けてから1か月半後の八月五日には姫路城受取のため、直矩が率先し隊列をそろえて江戸を出発する。

東海道では、途中箱根大権現や大津の三井寺にお参りし、京では義父の東園基賢からの接待も受け、二十一日には城受取の前線基地であった加古川に着く。

姫路での実収はこれまでよりかなり大きくなるので藩財政も仕切り直しだが、すぐ対応し、方針を筆頭家老に伝えたことについてはすでに述べた。

この年の暮れには、家臣たちから暮れの祝儀の挨拶を受け、その最後には、姫路藩主としての任務の満足感を「万々歳」と表している。

寛文七年十二月二十九日

「為歳暮祝儀　家老・城代・・・

近習は勿論之事　各出・・・誠天下泰平　国土安全　万々歳此時也」

7．越後騒動と所替え

（1）事件の内容

姫路で十数年がたったころ、いとこの越前松平高田二十五万石の藩主松平光長の跡継ぎをめぐって、家老同士を筆頭に藩内が二つに割れるという、のちに「越後騒動」と呼ばれる大きな事件が起こる。

光長の世嗣、綱賢は病弱で男子ができないまま、延宝二年（1674）年一月に四十二歳で亡くなる。

跡継ぎ候補は、父忠直が豊後大分で設けた異母弟で光長の家臣になっていた永見大蔵四十三歳、およびその大蔵の兄長頼の子万徳丸十五歳等であった。

結局大蔵はすでに高齢と云う事で引けられ、万徳丸とすることで一旦は収まった。

しかし、その後決定に不満であった大蔵には家老荻田主馬が付き、筆頭家老小栗美作は光長の薦める万徳丸を強く推した。

話はくすぶり続き、騒動も藩内挙げての大規模なものに発展する。五年後の延宝七年（1679）藩主光長は藩をまとめられず、ついに大老酒井忠清に直接訴える。

いとこであり、日ごろ親しかった直矩も光長から相談を持ち掛けられており、また、永見大蔵からも支援を求められていたことが「日記」に書き記されている。

延宝七年二月十二日

「天晴　今日越後中将より御飛札来　其文曰　一筆令啓達候・・・然者先頃当家中虚説儀出来　雖騒動有之候　早速事績安堵之至候・・・委細追付例参府之節面談加申述候」

酒井雅樂守とも近かった直矩は、その屋敷にも頻繁に訪れ、光長が穏便な扱いを受けるよう尽力していた。

結局、十月には騒動のもととなった永見大蔵、および荻田主馬たちに不利な幕府裁定が出され、かれらを含む関係者が松平各家へお預けとの処分となる。

しかし、直矩にとって大きな問題が起こるのはその後である。

（2）綱吉の裁定

翌延宝八年（1680）五月将軍家綱が没し、綱吉が五代将軍となる。これを契機に永見派は新しい老中堀田正俊へ再審を訴えた。

審問が続き、翌年の延宝九年（1681）六月二十二日には綱吉御前で裁定が下される。しかし、これは両派もちろん藩主光長にとっても最悪のものであった。

申し渡されたのは、一度出た幕府裁定に従わなかったとして、永見大蔵と荻田主馬は八丈島、そのほかもあわせて遠島処分が、また、小栗美作とその息子大六は切腹、という内容であった。

藩主光長自身も高田藩の領知召し上げ、かれをサポートしていた直矩は閉門（門扉閉鎖と出入り禁止）が命ぜられる。

さらにそのほぼ半年後、翌天和二年（1682）二月直矩に対し領知姫路の召し上げ、半分以下の七万石で豊後日田への所替え、との命が発せられる。直矩四十一歳であった。

8．復活への道

（1）日田・山形・白河

このあと「日記」は元禄八年（1695）まで続くが、現存している記述は極めて少なく、年に数日のみ、かつ、国芸関係記事のみとなる。

以下では「日記」を離れ、直矩の人生のその後について触れる。

豊後日田はもともと天領であったため、城郭も侍屋敷もなく、引っ越しした家臣たちは商家や農家も分散するなど住む家にはかなり苦労した。

藩主直矩が日田に入ったとの話はない。どのような理由で江戸住まいのままが許されたのかは不明である。

四年後、ようやく藩の元の姿への復活へ進み始める。貞享八年（1688）七月、三万石を回復し出羽山形十万石への所替えとなる。

当時頻繁に行われた所替えの中で、九州の豊後日田から東北出羽山形への所替えは全大名の中でも最長の移動を要するものであった。あるじの家臣に加え、親、女性、子供たち等を含むその家族たちにとって山形まではおそらく二ヵ月ほどは要する、長く苦労の多い旅ではなかったか。また、藩にとってもその経費は膨大であったことは間違いがない。

さらにその四年後元禄五年（1693）七月には、禄高も十五万石と姫路のときと同じに加増されて奥州白河に転封となる。ようやく復活を遂げたことになる。

かれが江戸藩邸で亡くなったのはその三年後の元禄八年（1701）四月、享年五十四であった。戒名は「天祐院殿鉄舩（船）道駕大居士」。たびたびの所替えで苦労したことが偲ばれる名となった。遺骸は白河に運ばれ、墓は現在白河市の小高い丘の上にある。

松平直矩墓所・白河市円明寺

山藩十万石として復活させる。直矩が没した四年後の元禄十一年（1704）年であった。

さらには、直矩次男知清の子の宗矩、すなわち直矩の孫は、越前松平宗家・福井藩主松平光通の養子として宗家の四代目藩主となる。

また、基知没後は子の義知が第三代白河藩主を継ぐが、寛保元年（1741）十一月かれが二十八歳のときこの家にとって三回目の姫路藩主を命ぜられる。直矩が姫路を離れてから五十八年後のときであった。

直矩自身は大きな事件に巻き込まれたことにより、最多の所替えという波乱万丈といえる人生を送ったが、その子供や孫たちもまた越前松平家を支える人材として活躍したことになる。

それも、多くの苦労を乗り越え、直矩が幕府からも評価の高い大名として位置づけられていたからであろう。

完

(2) 直矩の子と孫

最後に直矩の子供たちに触れておく。

かれは男子に恵まれていた。

二男の基知は白河第二代藩主としてこの家を継ぎ、三男宜富は越後騒動で改易・廃藩となった光長の養子となって、越前松平家を津